

書評

●書評 「流行神—民間信仰におけるハヤリ・スタリとそのメカニズム」
「女人禁制の人類学 相撲・穢れ・ジェンダー」

村田典生 著
流行神

—民間信仰におけるハヤリ・スタリとそのメカニズム—

岡本真生

A 5判 / 240頁
本体価格：5,500円+税
2021年3月刊
法藏館

第六章 民間信仰の盛衰の分岐についての考察
終章 神仏の流行と民間信仰継続のメカニズム

本書は、序章から第二章で本書の枠組みを説明しており、第三章から第六章で事例分析を試みている。よって、各章の内容は第二章を重点的に紹介していく。

まず序章では、六頁で「顕現」というキーワードが計七回用いられ、本書では「顕現」する流行神のメカニズムを検討していくことが示される。

第一章は、宮田登、伊藤唯真、櫻井徳太郎、鈴木岩弓による研究を「流行神の研究史」と位置づけて、これらの研究の背景には「社会的緊張や社会不安が根底にあり、人々がその不安を予知的にとらえ流行神を現出せしめている」という認識（十七頁）が存在していることを指摘する。

第二章は、内容もさることながら論じ方においても本書の要となる。そこで本書の論じ方に沿って概要を紹介する。はじめには、「流行神の顕現」と表現できる」（二二頁）とされる正法寺と御金神社には、民間宗教者たちは関与していないことから「現代と近代以前の同現象間に乖離が存在している」（二

本書は、「都市およびその近郊において顕現した流行神を主に取り上げ、現代に流布する民間信仰の諸相」（四頁）を検討した研究書である。この「流行神」とは、「神仏の流行という事象」（四頁）を指す。
全体の本書の構成と内容は、つぎのとおりである。

序章

第一章 流行神研究史の回顧と課題

第二章 流行りだす神仏—その構造と思想—

第三章 近世「医療信仰」に見る流行神の展開過程

第四章 「金運」をめぐる流行神の顕現

第五章 「縁結び」から見える現代の流行神

二頁）点を指摘する。そして筆者の問いが、つぎのように示される。「こうした現代に至るまで次々と顕現する流行神にすが
る人々は、自らが従前より進行している神仏とどのように折り合っているのだろうか。彼らが日頃から信仰している神仏と流行神の間には、いかなる差異が認められるのであろうか。どのような環境に置かれた時に流行神に、なびく、ものなのだろうか。流行神生成機運が従来の信仰から乖離していく心理や意識がどのように表出するのか」（二三頁）。つづく第二章第一節では、流行神の「ハヤリガミ」と読むニュアンスに着目し、宮田登による「現実の秩序を破壊し、他の次元の信仰体系を志向するカミ体系」という流行神の位置づけを持ち出して、これと桜井徳太郎による民間信仰論と照応して、「カミ体系」について検討する。その結果、流行神とは「現実の秩序に基づくカミ体系」と考えてもよい」（二六頁）という立場を表明し、本書の方向性を示唆する。そして第二章第二節では、「現実の秩序」について「共同体で永年培われた農事と信仰の習慣が日常的に運営維持されるための仕組み」（二七頁）であると位置づけるとともに、都市社会においても流行神が顕現する可能性を指摘する。そして、「カミに秩序が維持されるよう祈る共同体や個人、家族といった単位の総称」（二八頁）を「祈願構成体」と仮称する。さらに、宮田による流行神の「祀り上げ」「祀り捨て」を、「現実の秩序を回復あるいは復旧させるための信仰現象ではないか」（三〇頁）と主張する。以上のような論じ方は、宮田に

よる流行神研究の方向性とは異なることを明言したうえで、流行神の信仰体系の移行過程こそ論じる必要があると主張する。そして、つぎの二類型（ケース①：「現実の秩序を補完、あるいは復旧させるカミ体系」、ケース②：「現実の秩序を破壊し、他の次元の信仰体系を志向するカミ体系」）を抽出する。これら①と②が「流行神が展開する上での発展構造である」（三二頁）という見解にもとづき、「流行神に対するエネルギーとしてグラフ化」（三一頁）を試みる。これが、図一である。図一には三類型が示されているが、ケース③とは、ケース①と②の差異を論じるなかで生じたものである。著者によれば、ケース③は「流行の秩序とケース①、②との間隙を埋め、並立するカミ体系」である。第二章第三節では、多様な事例をケース①、②、③にあてはめて検証している。さらに、今後の検討課題として二点を挙げている。まず一点目は「顕現によって各地に発生した流行神に自ら参詣する手段を選択した民衆のバイタリティの考察」（四五頁）の必要性、そして二点目は「近現代における社寺と流行神の関係とそれにより選択される利生について考察すること、民衆の信仰観を浮かび上がらせる」（四六頁）必要性である。

そして第三章では、地誌や日記類を用いて近世、京都山科の妙見の流行神顕現の経緯を検証している。これは、ケース③に該当するといふ。

第四章では、御金神社と正方寺三面大黒天そして銭洗弁天を

取りあげ、流行神顕現の背景にはマスメディアが関与していることを指摘する。その一方で民間宗教者は介在していないことから、宮田による流行神の一特徴（民間宗教者の存在）は再検討する必要があると主張する。これらは、ケース①に該当するといふ。

第五章では、「婚活」の「パワースポット」として語られる東京大神宮を取りあげ、奉納された絵馬の祈願内容を分析し、「神社側の新趣向と身近な奇跡喧伝をマスメディアで『発見』した『婚活』に励む『女子』たちが、彼女たちの『ニーズ』に合わせて参拝する神社を選択している」（一四六頁）実態を分析したうえで、民間会社によるアンケート結果と照らし合わせることによって、「縁結び」の流行神は現代社会で必要に応じて顕現していることを指摘する。

第六章第一節および第二節では、「民間信仰」の利生や願掛けに関する複数の文献の記述から、「願」は時代によって異なること、そして「願」の条件等を明らかにしている。第三節から第五節では、「近世から近現代への民間信仰の潮流のなかでそうした信仰はいかに継続してきたのか、あるいは断絶の危機を乗り越えたのか」（一七六頁）について、複数の事例を用いて検討している。結果、「民間信仰の継続は利生が第一に重要な要素である」（一九九頁）だけでなく、「利生や『願』といった伝承を管理する主体となる社寺、地域」（一九八頁）の介入が必要であると提唱する。著者は、これらを「伝承管理母体」

と表現している。

終章では、伝承管理母体が「その利生の放棄ないし保存の選択と祈願構成体のその受容」（二一四頁）をすることによって、民間信仰の継続ないし断絶の方向性が決定づけられると主張する。そして最後に、「利生の拡散と収縮の速度が高速で、付帯条件が先鋭化していればその信仰はその時、『流行神』と呼ばれる」こととなり、民間信仰や流行神は「その時代を懸命に生き抜く人々の要請を受けて顕現する」（二一五頁）ことを指摘している。

それでは、本書に対するコメントを述べたいと記述する流れが、書評としては一般的であろう。だが、今回は一般的スタイルでは記述しない。今回は、京都民俗学会著者第三三三回談話会のエピソード、そして評者が実施した著者へのインタビュー成果を交えつつ、コメントを三点しておきたい。

京都民俗学会において、著者は本書に関する研究報告を実施した。その際、コメントーターが二名依頼された。村上紀夫氏と評者である。評者は、村上紀夫氏によるコメントを拝聴し、改めて本書の主張の所在を汲み取れているか疑問を抱いた。複数回にわたって本書を読み返した結果、本書は独特な主張展開をしているのではないかと考えるに至った。そこで書評執筆にあたって、著者に対して、インタビューを実施した。

（一）著者が目指す流行神研究の方向性についてである。まず、二〇二一年六月にオンラインで実施された京都民

決して同じものではないと考える、と。

本書のタイトルからも明らかであるように、著者には流行神のメカニズムを検討したいという意識があると思われる。しかし、「流行神のメカニズムを検討する」という一連のプロセスだけではなく、こうした研究営為を通じて、「何か」を検討したいのではないだろうか。たとえば、構成体や母体という集合における「心理や意識がどのように表出するのか」という研究の方向性があるのではないだろうか。

（二）著者の主張の「顕現」スタイルについてである。評者は少なくとも三点を発見した。

まず、著者によるオリジナルな展開である。「では〇〇か」という問いがなされた後に、著者の主張が示唆される傾向にあると思われる。ただし、示唆されるにとどまる傾向が高い。

二点目は、示唆された主張に再び立ち戻る点である。いささか唐突感も覚えたが、これこそ著者の主張の「顕現」スタイルである。たとえば、第二章第二節で、流行神は「拡大一辺倒で定着することはなく、拡大と収縮、すなわち流行と衰退が繰り返され、やがて定着し習俗化していく」（二二二頁）と論じている。本書は、一度根拠を示して自説を主張して貫徹するというスタイルではない。つぎの根拠を「顕現」させ、先に提示した自説を補強させつつ、自らの

主張以外への展開可能性をも示唆している。本書の論じ方からは図一で示されている波動形のような印象を抱く。まるで流行神に影響を受けているかのようである。それゆえ、本書の要となる第二章の要約は著者の論じ方を基調とした。著者の論じ方の魅力が、本書の楽しみ方の一つであろう。

しかしながら、評者による要約では、本書の魅力を十分に引き出すことは出来ていない。本書のスタイルを借りるならば、「では、なぜ評者の要約は本書の魅力を十分に引き出すことが出来ないのか」と表現されるだろうか。

これに対する評者の見解こそが三点目となる。それは、本書には、著者の生活に根差した独自の感覚が随所で「表出」している点である。比喩を用いて、流行神を説明する箇所が複数散見される。たとえば、「瞬間湯沸かし器的な熱狂」（四六頁）や「コンビニエンスストアに買い物に出かけるような」（一五二頁）等である。

評者は、こうした表現方法に至った理由について著者に問いかけた。それに対して、著者は興味深い経験語った。著者によれば、既に知人研究者の複数名からも「本書は論文をもとにしているけれども面白い」とコメントされている、と。「このような表現は、もしかしたら、これまで多様な同好会で会報の編集等に携わってきたからかもしれない」と。また「利生」という語句の使用も、自身の経験

に影響しているという。著者は経済学部出身であるがゆえに、読者のなかには、「利益」という語句に対して「りえき」という印象を抱く人も存在する可能性を考慮して、本書では「利生」を主に用いているという。

全体的に語句の定義がいささか曖昧と感じる点も少なくない。読者によっては、本書の論じ方について賛否両論あるかもしれない。しかし、著者の人生経験が一部表出している本書のスタイルこそ、本書の楽しみの一つではないだろうか。

(三) 図一「流行神の『流行の熱狂度』と『時間経過』の関係

(三二頁)の応用可能性を考えてみたい。ケース①・②・③が描かれたモデル図である。

この図の発想についても、インタビューを行った。これに対して、著者は自らの経験を引き合いに出して語った。自らの経験とは、自身の研究発表時にフロアから「流行神に通時性はあるのか」と問いかけられたことであるという。それゆえに、図一の横軸に「時間経過」を据えているという。その一方、グラフの縦軸には「流行の熱狂度」が据えられている。この「流行の熱狂度」には、おそらく「祀り上げ」「祀り棄て」が意識されていると思われる。しかし縦軸の説明は「流行の大きさ（流行の熱狂度）」と示唆されているに過ぎない。先にも述べたように、示唆することこそ本書のスタイルであり特徴ではあるが、少しばかり説

明を補ってもらえると理解がしやすくなると思われる。

そして、「流行の大きさ（流行の熱狂度）」の変化は、これこそ「構成体」や「母体」という集合における「心理や意識がどのように表出するのか」に該当するのではないだろうか。著者自身の内に所在する問題意識の方向性が、「顕現」されることを期待している。

書評

鈴木正崇 著
 女人禁制の人類学 相撲・穢れ・ジェンダー
 天田顕徳

四六判/372頁
 本体価格：2,500円+税
 2021年8月25日刊
 法蔵館

本書の構成と特徴

本書は「女人禁制」の問題に長らく取り組んできた筆者が、二〇〇二年に吉川弘文館より刊行した「女人禁制」以降の思索をまとめ、「考察の現在の到達点を示そうとした」ものである。章立ては三章構成で、副題にある「相撲」「穢れ」「ジェンダー」という三つのトピック毎に一つの章が立てられている。

第一章 相撲と女人禁制
 第二章 穢れと女人禁制
 第三章 山岳信仰とジェンダー

一見簡素な構成だが、それぞれ一六節、二二節、一四節からなり、最も長い三章一三節は二四項立てと重厚である。紙幅の都合で、ここでは章題のみを示す。

本書最大の特徴は、その視野の広さとアクチュアリティの高さにある。本書で扱われるトピックそれぞれ自体は、民俗学のテ

マとしてさほど目新しいものではない。だが、「文化人類学の立場からの考察を主軸にして、民俗学や宗教学の成果も応用し、歴史学や国文学の成果も必要に応じて取り込んで」（二頁）と筆者が述べるように、本書は多くの先行研究や史・資料、事論の深化を図っている。多様なディシプリンをまたにかけ、広くアジア地域でフィールドワークを行ってきた博覧強記な筆者ならではの一書だ。「多角的に論じた」（二頁）と筆者自身がいうとおり、本書の視野の広さは特筆すべきものがある。

本書のもう一つの特徴は本書のもつアクチュアリティである。「あとがき」冒頭に「学問や研究はまさしく時代の産物である」（三六四頁）と述べられている通り、本書は時代を強く意識したものとなっている。では、本書で意識される時代、あるいは状況とは具体的にどのようなものか。

本書執筆のきっかけは、二〇一八年に舞鶴で行われた相撲の地方巡業の一コマに端を発する一連の出来事にある。土俵上で挨拶をしていた市長が話の途中で倒れ、見物をしていった女性が土俵に上がって救命措置を施した。その際、「女性の方は土俵から降りて下さい」という場内放送が複数回行われ、現場の人々やニュースの視聴者などから日本相撲協会に非難が殺到した。この出来事を嚆矢として、相撲以外の女人禁制の事例も次々にメディアに取り上げられ、議論が沸騰した。そんな中、筆者のもとには取材依頼が殺到し、海外を含め一七社のマスコミから

言に与するものではないが、長年文化を研究対象としてきた民俗学徒の文化の客体化（や資源化）に対する態度が近年鋭く問われていることは疑いない。

筆者は本書で扱う女人禁制の問題について、歴史性に留意しつつそれが語られる文脈を解きほぐし、当事者の言説を重視した上で、双方向の対話の場を維持して多様な声に耳を傾けることが大切であると述べている。本書は開かれた対話と議論を促すための基礎資料と考える方の提示を目指しており、いくつかの問題については具体的な解決策も提言している。こうした本書の姿勢は、我々が目指すべき姿の指針の一つを示すものといえるだろう。本書は主題の枠を超えて広く読まれるべき一書である。

最後に本書は昭和女子大学女性文化研究賞（坂東眞理子基金）を受賞していることを申し添え、以下、評者が読み取った本書の要点を紹介する。

概要

第一章では、相撲の女人禁制が扱われる。筆者はまず舞鶴からの一連の騒動を振り返り、事件の「主役」をマスコミであると指摘する（二二頁）。女人禁制の概念が拡大解釈され、乱用されているという筆者の主張は既に確認した通りである。

続いて本章では、相撲の女人禁制が、正確には「土俵の女人禁制」であることを確認し、かつて「想定外」だった本場所で使用する土俵に女性が上がるといふ行為が、政治家やマスコミ

取材を受けたという。「原則として面談して説明し、一社あたり最低二時間」（三六五頁）はかけて対応するも、発表された記事には、加工が加えられていた。マスコミやマスコミに取材を受けた他の識者らが、女人禁制の概念を拡大解釈し、乱用していたのである。筆者はこの経験を「囚らずも現代社会のフィールドワークとなった」（一六頁）と振り返る。本書の意義を際立たせるために、この点をもう少し掘り下げておこう。

筆者は「まえがき」において「本書では、地元の当事者側に立ち、「土着の見方や考え方」に寄り添う視点を重視する」（四頁）という立場表明を行っている。先に確認したマスコミのエピソードと、筆者の立場表明からは、女人禁制がマスコミなどを通じて本来的な主体である当事者達の視点とは異なる形で「客体化」され拡大解釈・乱用されているという筆者の現状認識を窺い知ることができる。

いみじくも二〇二二年の第七四回年会シンポジウムのタイトルが「文化財と地域資源 活用をめぐる農政学との対話」であるように、今日、文化の客体化は、民俗学を学ぶ我々にとって身近な問題である。とりわけ二〇一八以降の文化財保護法の改正によって、国がより積極的な文化の「活用」へと舵を切るなかで、文化の客体化と資源化が加速している。二〇一七年、当時の山本幸三地方創生担当大臣が学芸員には「観光マインド」がないという文脈で「一番のガンは文化学芸員といわれる人たちだ」と発言したことも記憶に新しい。無論、評者はかかる暴

など部外者の働きかけによって意識化され、「土俵の女人禁制」として概念化していく様子を跡付ける。ドクサやハビトウスであったものが、言説化し拡大解釈されて流通したというのが筆者の見立てである。併せて筆者は、「土俵の女人禁制」が言説化される背景に、本来「大相撲」において一時的に顕在化する土俵の聖性が、年間に何度も大相撲が行われ、聖性が「日常化」することにより、土俵が「恒常的」な祭場とみなされるようになった点を指摘する（二八頁）。

五節六節では土俵祭の様子と、土俵祭で迎えられる祭神の変化に光を当てる。筆者は土俵祭の次第と歴史を紐解くとともに、一九五二年から始まった相撲のテレビ中継により相撲が「見られる」視線にさらされる場に変質した点、一九五五年に行われた天覧相撲により相撲の権威が高まった点などを確認する。祭神については、本来は、本場所の間だけ一時的な祭場としての土俵に由来する、「神」以前の「カミ」であったことが指摘され、現在の相撲三神が祀られる端緒となったエピソードなどに触れながら、時宜や状況に応じて「伝統」が変更されてきた様子を丁寧に跡付ける。

七節からは千秋楽の表彰式に注目する。筆者は一般人が表彰式に際して土俵に上がるようになった端緒を、一九六八年の内閣総理大臣杯の授与であると推定し、これを土俵の「俗化」の始まりと評価する。日本相撲協会の役員は紋付袴で正装して土俵下で履物を変えて土俵に上がるのに対し、一般人は潔斎¹⁾（九七頁）。

二節では山の女人禁制・女人結界の始まりを、仏教の「不邪淫戒」に由来するとして牛山の議論を解説し、これを寺院成立後の「堂舎の結界」に女人禁制・女人結界の起源を求め、「戒律起源論」であるとする。対して筆者は、女人禁制・女人結界の起源を、仏教以前の野外の境界である「山の境界」に由来すると推定し、三節六節において開山伝承や縁起、考古遺跡、伝承などを紐解き自説を展開する。

七節から一二節では女性に対する穢れ観の時代的な変遷を、(一) 九世紀後半以降、従来の禁忌が法制化され、仏教の影響で女性の山岳と杯の規制が確立された時代、(二) 室町時代後期以降、「血盆経」が女性の生理的出血を罪業と結びつけ、女性のみが落ちる血の池地獄を説いて血穢を強調して女性の負性が強まった時代、(三) 江戸時代中期以降、講の発達で民衆の山岳登拝や女性参詣者が盛んになり、禁忌が意識化され民衆化

法も略式で土俵に上られるようになったのである。日本相撲協会では女性を土俵に上げない理由を伝統であるとするが、相撲界と一般人を状況によって使い分ける一貫性のない説明であり、表彰式の土俵が「文化的性差、ジェンダーが明示される場に姿貌」(三九頁) したと厳しく指摘する。

九節では議論を収束させるために表彰式の再検討を行う必要があることが主張される。相撲は祭場としての土俵で行う近世以来の「儀礼」である。それを近代の「儀式」(式典)と混淆し、「伝統」と呼ぶことに問題の根源があるとして、儀礼とイベントを峻別し、神送りを後に表彰式を行うか、表彰台を土俵外に特設すべきであるという考えを示す。

一〇節からは大相撲の「伝統」が近代において「創られていく様子を確認する。明治天皇による浜離宮での天覧相撲や、相撲常設館としての國技館の開館、土俵屋根の神明造への改変などが紹介され、大相撲の伝統の多くが近代において「創られた伝統」であり、相撲が時代に応じて変化してきた様子が跡付けられる。

章末ではここまでの議論を振り返りつつ、相撲の本質を「興行」であると指摘する。相撲は特に明治以降、多くの改革を行ってきたが、江戸時代以来の多くの前近代の慣習を残しながら時代への適応を模索し、興行としての面白さを追求してきたのである。大相撲の魅力は前近代と近代の混淆にあり、相撲協会は「云統」を再帰的に捉え直すことで、外部からの批判に

された時代の三段階に整理する。

一三節一七節では修験道の女人禁制・女人結界が検討される。近代以前の修験道の長期にわたる展開と民衆化が女人禁制の維持に果たした役割の大きさがまず指摘され、次に近代以降、女人禁制の伝統に改変を加えた例として出羽三山を、女人禁制や女人結界が不明確だった例として英彦山、伯耆大山をそれぞれ取り上げ、各地で行われた解釈の多様性を示す。

一八節と一九節では民俗学や人類学、歴史学などで展開された穢れ/ケガレ研究を整理し「一般論に転化」することが目指される。筆者は櫻井徳太郎と波平恵美子、網野善彦らの議論を整理し、「機能論と構造論、過去と現在、伝承と文献を相互に関連づけて整合的に考えることは難しかった」(一五八頁) とする。その上で「機能論と構造論を接合し、歴史的視野を考慮した上で、モデルとしてのケガレ論と歴史の中で変化してきた穢れ論を統合する」(一五八頁) ことを試みる。具体的には「コスモロジー」と「イデオロギー」の二つの方向性を推定し、それらが交錯する場の中にこれまでの諸論を位置付けた二つのモデルを提示する(一五九頁、一六一頁)。「明確に定義し一元的な概念で把握しようとする」と膠着してしまふ(一五八頁) 穢れ/ケガレ概念をコスモロジーとイデオロギーの間で動体的に捉え、歴史的に説明していく議論は本書の白眉である。

他方で、評者が門外漢の故か、本書で示される2つのモデル図のうち、「穢れと不浄の動態」については地の文との対応関

係や、図中に示された一部の矢印(例えば「浄め」と「穢れ」、「浄」と「不浄」の間にそれぞれある十字の矢印のうち、縦方向のもの)の意味がやや見えにくかった。本書が極めてアクチュアルで重要性の高いテーマを扱う以上、関係する議論に不慣れた読者が本書を手取ることも十分想定される。その意味では本書の要点の一つでもあるモデルの説明にはより多くの紙幅を割く価値もあったように思われる。

続く二〇節と二二節ではスリランカやインド、チベットなどを取り上げ、類似事例の海外比較が行われる。二二節では新型コロナウイルスの蔓延により、穢れの表象が感染者に適用されていることを指摘しながら本章全体を振り返り、女人禁制の問題を早急に一般化、普遍化することは自制するべきであることが改めて確認される。

第三章では、ジェンダーの視点から、女人禁制を現代の問題として捉える試みがなされる。本章ではまずジェンダー概念について概観したのち、第二節で山の女人禁制と女人結界についての概略が述べられる。続く三節、四節では明治における女人結界の解禁とその後の議論を振り返る。

次に本章五節の一節では、女人禁制をめぐる「言説」のありようを「歴史の中の女人禁制」(五節、六節)、「習俗としての女人禁制」(七節、九節)、「社会運動の中の女人禁制」(第一〇節)、「差別としての女人禁制」(一一節)の四つの角度から分析する。

五節、六節ではまず、「女人禁制」という四字熟語の史料上の初出と文脈が検討されるとともに、第二章で述べられた筆者の「山の境界」論が再確認され、山の境界が山の結界へと読替えられた可能性を指摘する。

七節、九節では、習俗としての女人禁制の規制のあり方を、聖地や社寺に関する「恒常的規制」と、生理や出産の期間に限定される「一時的規制」に整理し、男性の山岳登拝についても一時的な規制が適応されることを示しながら、女人禁制が問題になるのは通常、ある空間に対する「恒常的な規制」であると指摘する。続いて女人禁制が様々な形で拡大解釈・拡大適用されている状況をトンネル工事の例などを通して確認するとともに、海外の事例も紹介し、国内外を問わず生活全般から信仰の世界に至る広い領域で、ジェンダー秩序が働いていることを確認する。

一〇節では、インドの事例が取り上げられる。注目されるのはケララ州のアイヤッパン寺院の女人禁制に関わる問題で、女性活動家らの運動や、カーストなどの階層制が複雑に絡み合い、社会運動として独自の展開を見せている様子が紹介される。一一節では、「差別としての女人禁制」言説の特徴を「差別と人権を結びつけ徹底して近代の言説で相手を批判することにある」(二三頁)と指摘し、西欧由来の「人権」の言説が、あたかも普遍的な真理であるかのような主張が、対抗言説の構築を封じ込めてしまう可能性を示唆する。本質主義的で時に強

いイデオロギー性を持つ女人禁制反対への声が、地域や熱心な信仰者の「このままにしておいてほしい」、「山上さんのお陰で生きていける」という声をかき消してしまうのである。同時に筆者は女人禁制を維持する側の問題点も指摘する。人権論には対応せず、「伝統」の継続を正当性の根拠として反対意見を封じ込めようとする点である。人権が伝統かという二項対立式の議論ではなく、差異の多義性に注目し、それをすくい上げていくことの重要性が示される。

一二節では、「差別としての女人禁制」の言説に影響を与えたフェミニズム運動に注目する。特に「第二波フェミニズム」運動に触れながら女人禁制の相対化を試み、山岳信仰をジェンダーの視点から読み解く際の主題が検討されている。

一三節では大峯山麓の洞川(奈良県天川村)に光を当てて。本節は全二四項七一ページからなる大部だが、洞川の詳細な歴史や女人結界の変動、女人結界の解禁をめぐる諸議論や運動、観光化や文化遺産化などの議論が極めて手際よくまとめられている。本節の議論は章末に二つの年表として整理されおり、とりわけ近代以降の洞川の様子を知るための現時点の「決定版」ともいえる内容となっている。

章末ではここまでの内容をまとめつつ、改めて最終的な選択や判断が当事者たちにこそ委ねられている点が強調される。筆者によれば女人禁制には様々な要素が絡み合い、関与する者の立場が重層化し複雑化して捻れ錯綜している。しかし、多様な

行為主体性を担う人々のパフォーマンスを解きほぐす鍵を握るのはあくまでも地域社会であり、土地の自然や文化や歴史が育んできた生活者の暮らしによる体験知を現代社会の動きに合わせていかに調整していくかが問われているのである。

おわりに

冒頭の繰り返しとなるが、こうした状況に対して、筆者は地域を冷たく突き放すのではなく、開かれた議論のために多様な視点から説明を尽くし、時として自らも議論に参画している。こうした姿勢は現代において民俗学を学ぶ我々の指針となる点を再度強調し、評を終える。